

4 章 UBEビエンナーレまちなか会場プラン

4. 1 概要

UBEビエンナーレは、27回展では10万人近い来場者を記録し、宇部市外、山口県外からの来訪者も伸びてきている。しかしながら来訪はときわ公園会場にとどまっており、中心市街地に設置されている野外彫刻を回遊して鑑賞する観光客の姿はまばらである。中心市街地の彫刻の設置状況をみると、数としては100点ほど設置されており、十分な数が真締川公園周辺やシンボルロードに設置されている。

UBEビエンナーレに来訪者が多くある理由としては、①新作の彫刻が18点（第28回展からは15点）も一気にならぶため「展覧会」としても楽しめること、②ときわ公園の野外彫刻展示場の環境が彫刻公園として質が高いこと、③遊具型彫刻や具象彫刻、抽象彫刻、様々な素材の彫刻など、多様なアプローチの彫刻が一同に展示され多様な楽しみ方ができること、が考えられる。

実際に市民ワークショップで市民の意見を聴いてみると、野外彫刻は日常のなかで、環境の一部として愛着を持って受け入れられていることを感じる一方で、場所を訪れる強い誘因要素には至っていないことがわかった。中心市街地に彫刻によって人の流れをつくるには、まちの日常の一部としての彫刻ではなく、彫刻公園としてランドスケープと一体となった美しい環境の実現、芝生広場やフラワーガーデン、カフェやビヤガーデンなど市民が楽しめる環境と一体で整備をしていく必要がある。

本章では、UBEビエンナーレの開催会場をときわ公園だけでなく、中心市街地に整備し、ときわ公園会場と中心市街地会場を交互に活用することで、UBEビエンナーレによる人の流れを中心市街地にも引き起こすプランを検討する。

中心市街地において、UBEビエンナーレ会場の立地として適正があるのは、現在整備が進行している「新庁舎周辺および真締川公園」である。真締川公園にはすでに彫刻が複数展示されているが、育ちすぎた植栽との不調和や、彫刻公園としては中途半端な状況にあり、真締川の水辺の良さが生かされていない。これを新庁舎整備と併せて刷新し、UBEビエンナーレ会場として質の高いランドスケープデザインの整備を行うことで、新庁舎と一体で宇部市のまちづくりの歴史、特徴を表現することにつながり、新庁舎からの人の流れやまちの地域核としての要素を強くすることにつながる。

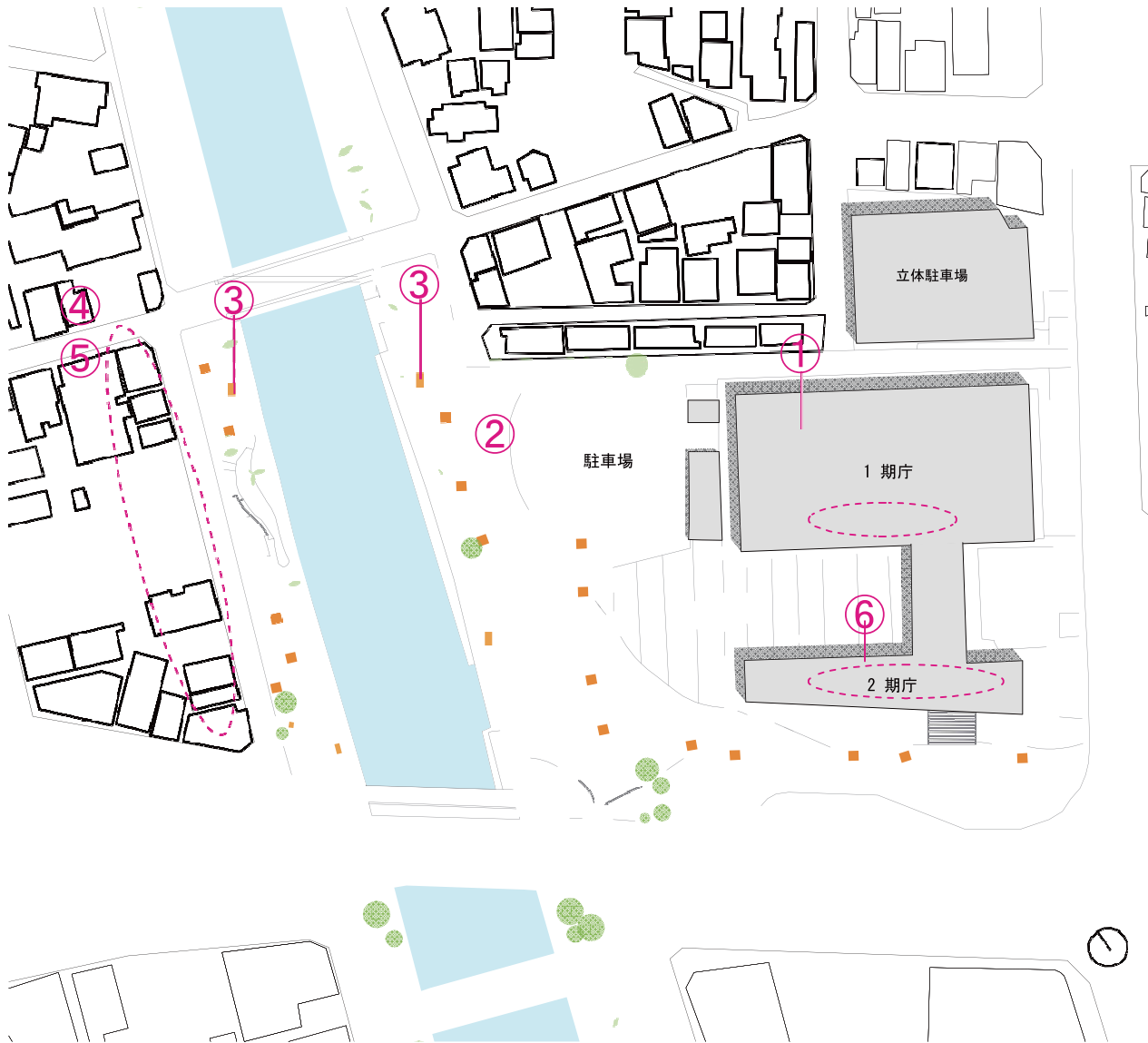
4. 2 UBEビエンナーレまちなか会場プラン

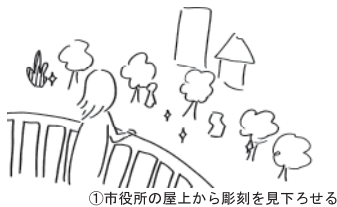
＜プランの内容＞

- ・新庁舎をアートの拠点にする
- ・新庁舎周辺に、UBEビエンナーレまちなか展示会場を整備する
- ・宇部産業祈念像など数点の重要な永久設置彫刻を核として15点の作品の展示場所を回遊することで、新庁舎の回りに人の流れを生み出す
- ・国道沿い、新庁舎に設置予定の宇部広場、真締川公園の兩岸を回遊するように会場を整備する
- ・新庁舎の2期工事部分に UBEビエンナーレのインフォメーションセンターを設置し、ビエンナーレ開催時の受付や市内の彫刻展示場所の回遊マップなどの広報発信を行う
- ・新庁舎周辺整備やガーデンシティ構想と連携して計画を行い、総合的に宇部市の ビジョンを環境として具現化する
- ・園路は見通しに配慮し、ユニバーサルに開かれた明るい空間とする
- ・会場周辺の空き家を様々な制度によって活用し、カフェやアーティストの滞在場所などを整備する。市役所からまちに人の流れと賑わいが生まれるようにしていく

4. 3 UBEビエンナーレまちなか会場の運営方針案

- ・UBEビエンナーレは2年ごとに開催され、会場はときわ公園会場の1会場で行われている。
- ・本展の翌年も全作品展示される形をとっており、作品は2年間野外展示され、次の本展設置のタイミングで買い上げ賞と寄贈された彫刻以外は作家に返却されている。
- ・まちなか会場とときわ公園会場の2会場で運営する場合、それぞれの会場は4年ごとに新しい彫刻に刷新されることになる。
- ・宇部に行くと2会場で30点の新作野外彫刻がみられるというのは彫刻展覧会としての価値を高める＋市民の愛着のある彫刻がより長く設置されるなど利点がある。
- ・2会場で運営することで、情報発信や案内が2か所で必要になるなどが想定されるが、新庁舎内にインフォメーションゾーンを設ける＋「UBEアート・コミュニケーター（＊P61参照）」を育成する、などで対応できる可能性がある。





①市役所の屋上から彫刻を見下ろせる



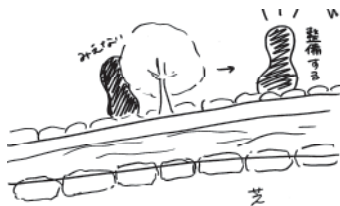
②道路を廃止して歩道を広くする



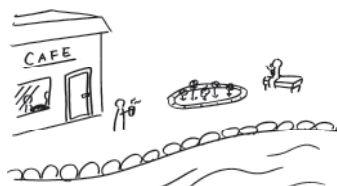
③彫刻を集中的に配置



③子どもが遊べる彫刻がある



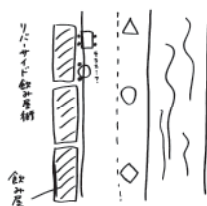
③木と彫刻の調和を図る必要がある



④川沿いの CAFE



④ランチ限定のテイクアウト



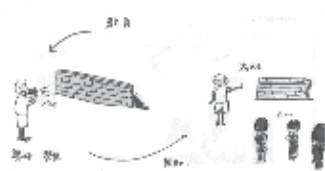
④川沿いの飲屋街



⑤夜だけ地域住民が集まる飲み屋に変わる



⑤街に集まる多様な人々を受け止める場所



⑤街中の面白い情報が集まる場所



⑥アート産業位置付ける展示

①多様な視点場の確保

市庁舎の屋上を開放することで、彫刻の集中展示や中央町、工業地帯が一望できるビューポイントを作り出すことができる。

②歩行者、滞留者を受け入れる場をつくる

川沿いの道路を廃止し、歩道空間を広くする。また、彫刻広場をつくることで、歩行者や滞留者を受け入れる場をつくることができる。

③真締川の親水空間の回復

真締川沿いに彫刻を集中展示することで、これまであまり人のいなかった場所を滞留空間化して、真締川の親水空間を回復する。そのためにも、子供が遊べるような彫刻の設置や園路の整備が必要となる。

④来訪者の滞留空間の整備

川沿いカフェやランチ限定の仮設店舗、飲食店街を整備し、真締川への来訪者の滞留空間を整え、お昼を川沿いで食べられるようにするなど、日常的に真締川が活用されるようにする。

⑤交流の拠点をつくる

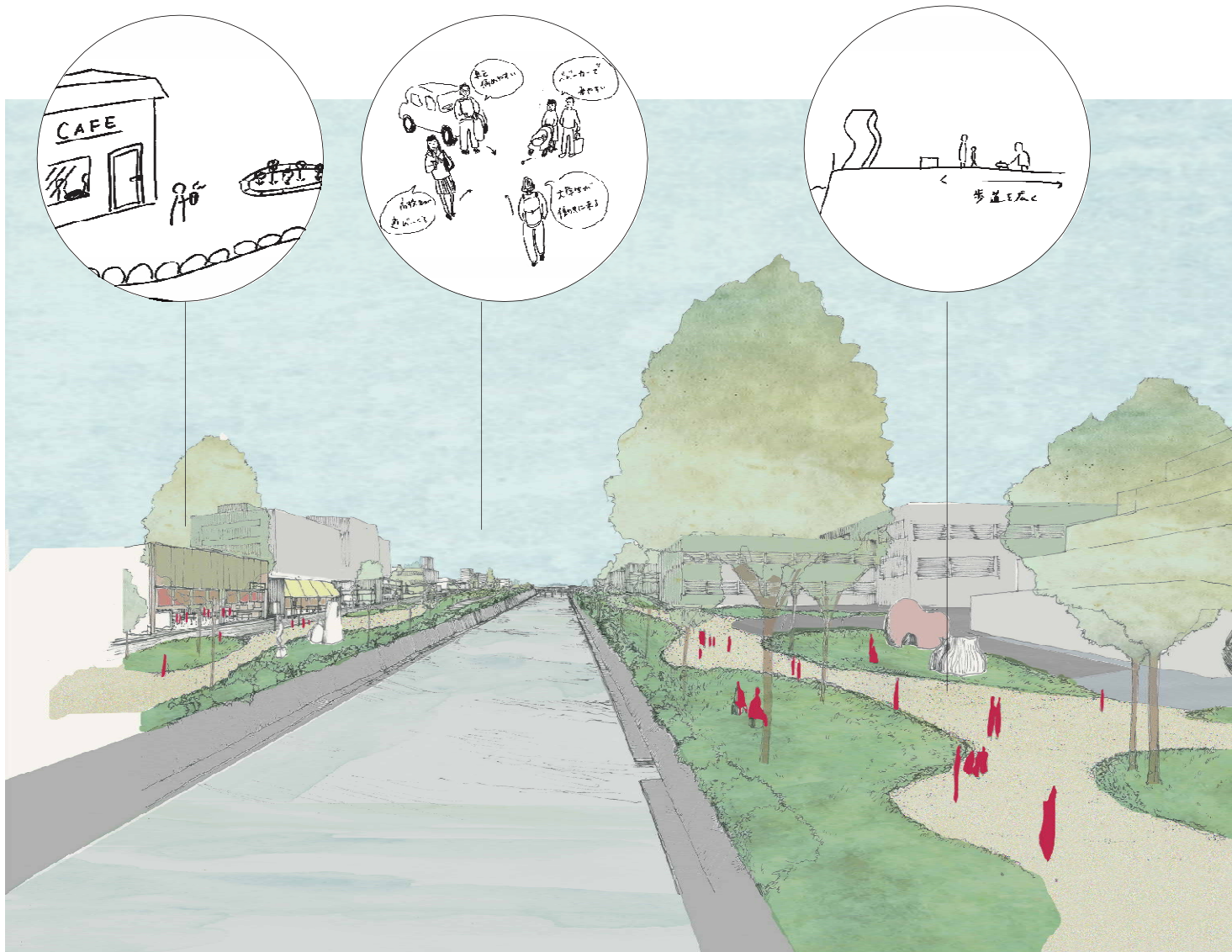
ビジターセンター機能を包含したアーティスト・イン・レジデンスの拠点をつくることで、地域住民×地域住民、地域住民×アーティスト、アーティスト×観光客といった多世代の多様な人々の交流ができるスペースをつくる。

街に眠っているレトロで顔になりそうな街角空き家物件のリサーチをし、オーナーの協力が得られる物件を「アーティスト・イン・レジデンス」拠点としてリフォームをする。

UBEビエンナーレや中心市街地の彫刻の情報を発信する場所。オススメのルートや周辺の施設（飲食店や雑貨屋といったオススメの個人商店など）を紹介する機能をもつ。

⑥アートの拠点をつくる

新庁舎1期庁舎のロビー部分や2期庁舎を活用して、絵画や特撮、フィギュアなど、彫刻に留まらない様々なジャンルを展示し、本市のアートを位置づける場を展開する。





5章 彫刻教育についての基本方針

宇部市では2011年度（平成23年度）より本格的に彫刻教育に取り組みはじめた。初年度は見初小学校、恩田小学校を対象に延べ68回、1,104人の参加があった。以降は、中学校にまで範囲を広げるとともに、対象小学校も増やし、授業の内容も美術の先生と連携して毎年創意工夫を重ねた。2016年度（平成28年度）からは教育委員会が彫刻教育を予算に組み込む形でバックアップがあり、2016年度は、延べ134回の授業で10,172人の参加があった。2017年度（平成29年度）までの7年間で、延べ27,470人の参加があり、大きな成果がでている。2015年度（平成27年度）には初年度から彫刻教育に積極的に取り組む見初小学校が、時事通信社の教育奨励賞を受賞している。

「地域の特色のある教育」をつくっていくことは、今後の地方創生の最重要課題のひとつであり、彫刻教育はUBEビエンナーレの「教育」、「普及」、「広報」を考える上でも重要な要素となる。

また彫刻教育を受けた宇部の子供たちの成長に合わせ、現状の小学生、中学生対象のプログラムを高校生、大学生、社会人を対象とした多様な内容に展開していく準備が必要である。そのことによって、真にUBEビエンナーレが宇部市の文化遺産として根付いていくことにつながる。

<方針1>宇部市の小学校、中学校と連携した彫刻教育の継続・強化・展開

現状では大きく成功している宇部市の全小学校、美術部のある中学校と連携した彫刻教育は今後も内容を工夫しながら継続していく必要がある。彫刻教育の質を向上していくためには、次のような取り組みが重要になる。

プログラム1 彫刻教育ワークショップ方法のマニュアル化プロジェクト

※7年間宇部で試みられてきたワークショップで、プログラムプランナーが蓄積してきたプログラムのメソッドを、編集者やアーキビストと共にマニュアル化していく。マニュアル化によって小学校、中学校の日々の教育でも彫刻教育の内容を応用・実践できるようになり、将来の学芸員スタッフの異動などの変化に対してもプログラムの質が維持できる。マニュアルをつくることで、宇部方式の彫刻教育の質を確立していくことにつながる。

プログラム2 彫刻教育ワークショップの記録、アーカイブ化プロジェクト

※7年間宇部で試みられてきたワークショップの授業記録を、開催日時、開催場所、開催内容もふくめてアーカイブしていく必要がある。アーカイブにあたってはその成果も含めて検証し、今後の新しい教育内容の展開につなげていく必要がある。そのためのプログラム1と連携した形で行うのが望ましい。

<方針2>高校生、大学生、社会人を対象にした彫刻教育の展開

彫刻教育を受けた高校生、大学生、あるいは彫刻教育に興味をもつ大学生、社会人には、彫刻教育の担い手として参画してもらう形が、共に育ち・学ぶという地域の共助の精神からふさわしい。

そこで、「UBEアート・コミュニケーター（*P61参照）」への高校生、大学生などの参画により、将来的な彫刻教育の一翼を担う人材の育成に繋げていくことが望まれる。

プログラム3 彫刻教育ワークショップの担い手育成プログラム

「UBEアート・コミュニケーター（＊）」の活用

※今後の彫刻教育の展開、彫刻教育のサスティナビリティを考えた場合、ワークショップの担い手を育成するプログラムをつくっていく必要がある。

現在、UBEビエンナーレは、野外彫刻部門、AIR部門、プロポーザル部門という3つの部門と、さらには彫刻教育を同じ学芸員チームで運営している。それゆえに、例えば UBEビエンナーレ本展の年には積極的に UBEビエンナーレAIR部門や彫刻教育を展開できないという問題がある。

彫刻教育の充実には、UBEアート・コミュニケーターの育成が必要であり、なかでも山口大学教育学部、山口学芸大学、宇部フロンティア大学などとの連携により、教育と芸術の融合によって地域創生を志す若者が参画することが望ましい。

（＊）…「UBEアート・コミュニケーター」

アートによるまちづくりを市民全体で行うためには、誰もがアートと触れ合うことができるようにアートとひとをつなぐ人材が必要となる。宇部市のまちづくりの原点である彫刻のみならず、絵画や音楽、ダンス、工芸など、あらゆるアートと人、人と人、人とまちをつなげる人材がUBEアート・コミュニケーター。コミュニケーションに必要なおもてなしや、「伝える力」を習得する研修を行うとともに、アート・コミュニケーターがアイデアを出し合い、協力して自主的な活動を行う。

市は、新庁舎を「アートの拠点」とし、「UBEアート・コミュニケーター」は、庁舎のアートのコーディネートをを行う。

＜方針 3＞彫刻家や美術家を志す若者を対象にした彫刻教育の展開

宇部市の200点を超える野外彫刻のコレクションや、UBEビエンナーレの50年の歴史によって蓄積してきたノウハウ（UBEビエンナーレ学芸員や設置の担当者、資材の会社などが実施してきた彫刻の運搬、設置、維持、管理）は、彫刻家や美術家の制作を支援する重要な資源であり財産である。その資源を社会に対して可視化していくために、彫刻家・美術家の教育プログラムを構築し、彫刻家や美術家を志す若者と宇部市との接点をつくっていく必要がある。

プログラム 4 彫刻・美術レジデンス事業の構築

※現在 UBEビエンナーレ AIR部門では、まちなか、中山間地域、こどもビエンナーレの3つのプログラムがあるが、これに付加する形で、1年間の滞在制作のレジデンス事業をつくる。滞在制作のためのスタジオは、ときわ湖水ホールなどを改修して整備し、UBEビエンナーレ学芸員のサポートを受けながら、彫刻やアートの多様な作品を制作する。制作した作品はそのまま UBEビエンナーレでの展示の一部となる。滞作家に対しては、彫刻の素材、設置、運搬、維持、管理などのさまざまなチュートリアルプログラムを構築し、そのことによって若い作家の作品展開の幅が広がるような教育効果を持たせる。

6章 広報発信についての基本方針

2012年（平成24年）の市民提言以降、東京・ヒカリエでの展覧会や福岡・九州国立博物館など大都市圏でのPR展や、野外彫刻に力を入れるスペイン・カステジョ・デ・ラ・ブラーナ市や、韓国・昌原市、バルセロナ現代美術館との連携、瀬戸内国際芸術祭との連携など、国内外に様々な広報発信を行ってきた。合わせて、ポスター、チラシなどのビジュアルデザインの強化、パンフレットやカタログのデザインの刷新も行ってきた。その効果の大きさは、来場者数の伸びをみれば明らかである。

今後はさらに、市民運動から始まったUBEビエンナーレの歴史への深い共感を得られるようなストーリー性、UBEビエンナーレだけでなくアーティスト・イン・レジデンス部門への拡大、まちづくりと連動した彫刻事業、彫刻教育の取り組み、UBEビエンナーレにおける彫刻設置や維持管理のノウハウの研究及びその成果の可視化など、内容に応じた多様な広報発信を行っていく必要がある。

また広報発信に際しては、ホームページや展示ブースの質を高めることは継続する必要がある、それ以外にもフリーペーパーの発行や、書籍化の検討など、ツールを増やしていくことも検討する必要がある。

＜方針1＞グローバルな情報発信

- ・世界中からアクセスがあるホームページにデザイン性の向上を図っていく必要がある
- ・you tube などへの質の高い動画の投稿を行う
- ・歴史や記録の書籍化（多言語化）



＜方針2＞国内都市圏での広報発信

- ・東京首都圏での広報発信
宇部は山口宇部空港からのアクセス性が非常に良いため、巨大な人口を抱える東京首都圏での展示は重要になる。（すでに実績のあるヒカリエで、2年に一度ペースでの展示やシンポジウムなどを継続することで、情報のリーチ率が高まる。）
- ・九州都市圏での広報発信
近年毎年設置をしている九州国立博物館でのブース展示の継続だけでなく、福岡の人の目に触れやすくするような戦略（美術館へのフリーペーパーの設置）や看板広告などでの認知度を高める。
- ・瀬戸内国際芸術祭での広報発信
新しく始まったアーティスト・イン・レジデンスなど現代美術での試みを紹介することや、旅としての宇部の魅力を紹介することで、宇部への来場者を増やす。
- ・京都都市圏での広報発信
ロームシアター京都など、新しい文化発信地での広報発信、シンポジウムなどを開催し、芸術文化に興味のある人への発信、露出を図る。

<方針3> 美術系大学に向けての広報発信

- ・全国の美術系大学と連携したシンポジウムや学生の滞在研修を企画していくことで、アーティストとしての参加や観光客としての来訪者を図る。
- ・アーティスト・イン・レジデンスおよび、レジデンス拠点の充実を行うことで、UBEビエンナーレの新しい取り組みを芸術の実践者、研究者に広く知らせることにつながる。
- ・UBEアート・コミュニケーター事業と連携することで、より多様な内容の芸術の実践者、研究者に広く知らせることにつながる。



大学地域連携シンポジウムの事例



大学地域連携シンポジウムの事例

<方針4> 都市計画（地域核）と連動した広報発信

- ・ときわ公園への交通アクセスの整理（自家用車だけでなく、空港や駅からのバスや電車など観光客動線に配慮する。）
- ・地域核にビジターセンターやインフォメーションセンター機能を持たせ、そこでの情報発信の強化
- ・中心市街地、中山間地域における彫刻や芸術だけでなく、食や宿泊など「旅」としての魅力発信の強化

7章 対話型市民ワークショップの記録

7.1 ニーズの抽出

ここでは、2018年12月～2019年1月に行われた、対話型ワークショップのまとめを行う。対話1：「愛される彫刻とは何か?」、対話2：「愛される街とは何か?」とテーマを定め、市民の彫刻や街に対するニーズの抽出を行なった。

対話1：「愛される彫刻とは何か?」

日時：2018年12月2日（日）13時30分～ 15時30分

場所：ときわ湖水ホールアートギャラリー

参加人数：38名

インプットレクチャー・ファシリテーター：藤原徹平（横浜国立大学准教授）

コメンテーター：日沼禎子（女子美術大学教授）

協力：榊原充大（RAD -Research for Architectural Domain）

テーマ：UBEビエンナーレの財産をどうやって未来に活かすのか?

実施内容：

ワークショップの初めに、「UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）を考える会」提言書の内容を振り返った。提言書では「教育」「観光」「普及」「広報」の4項目における総合的な充実化を重視し、市民が楽しめるビエンナーレになることを目標とすべ



きと結んでいる。次に、藤原氏、日沼氏より AIR（アーティスト・イン・レジデンス）部門や彫刻教育など、提言書以降の UBEビエンナーレの改革内容を紹介。

次に宇部市のみならず、中心市街地の空洞化や、ネットショッピングによる街の使い方などの今後の劇的な変化など、街づくりにおける課題を藤原氏より紹介。

後半はワールドカフェ形式でのワークショップを開催。

テーマ１：「愛される彫刻とは何か？」

各自５分間考えた内容をグループごとに全員発表、ディスカッションの上で、各グループの代表者が発表を行った。彫刻の街ならではの多様な視点から、彫刻が市民に愛されるための視点が提示された。

テーマ２：「彫刻と宇部の街は、どんなところにどんな風につながっていったらよいのか？」

各自１５分間考えた内容をグループごとに全員発表、ディスカッションの上で、各グループの代表者が発表を行った。宇部の街にどのように彫刻を配置・発信していくべきなのか、自由な解釈から様々な提案があった。



テーマ１：「愛される彫刻とは何か？」

愛される彫刻とは？

- ・感情移入できるもの
- ・構造的に安心できる
- ・自由に出入りできる彫刻
- ・手で触れることができる彫刻
- ・身近なモチーフの彫刻
- ・インスタ映え
- ・場所に意味を持たせている彫刻

- ・触れることができる
- ・ずっと見ていたい彫刻
- ・遊べる、座れる彫刻
- ・パッと見て面白いと感じるもの
- ・風景と調和しているもの
- ・あるいは逆に風景から良い意味で不調和で浮いているもの

- ・多くの人が見たくなる
- ・人々に覚えてもらえる彫刻 ⇒ 触れる、体感、遊べる、動きがある
- ・自分が良いと思ったものを愛する
- ・子供たちが集まる彫刻が愛される
(なので子供たちが選ぶ賞というのがあったら良いと思う)
- ・作者の意図がよくわかるもの
- ・歴史を象徴したもの ・規模が大きいもの

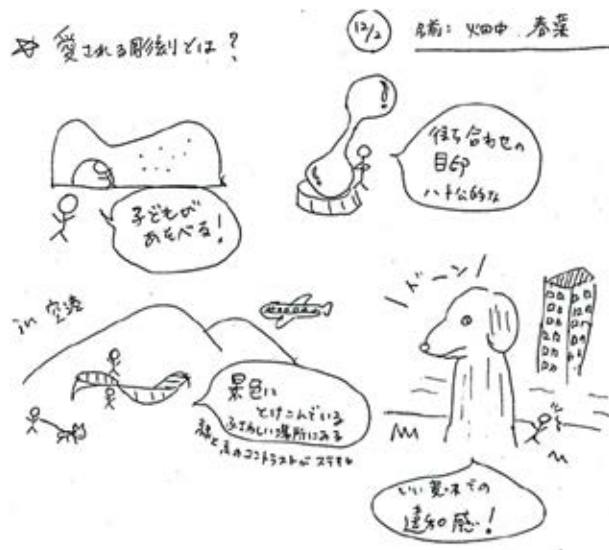
- ・子供の時からよく遊んだ彫刻
- ・自分の子供が好きな彫刻は愛着がわく
- ・何度でも観に行きたくなる
- ・四季のなかで変化がある彫刻
(光の当たり方の違い、いろんな楽しみ方ができる)
- ・ふるさとの印象を代表する彫刻
- ・原風景の一部となるような彫刻
- ・何かしら関わるきっかけのあった作品を愛してしまう

- ・触ってみたい、乗ってみたいと思える彫刻
- ・ユーモアがある
- ・余韻がある
- ・TV などでも紹介されるような超億
- ・彫刻から人を愛してくれる(双方向に関係がある彫刻)
- ・自分で彫刻清掃をしたものは愛してしまう、気になってしまう
- ・子どもとつながる彫刻

- ・触れるもの、乗れるもの、遊べるものが圧倒的に愛される
- ・時代の経過を感じるもの
- ・人それぞれに違った思いを得るような抽象性の強い彫刻
- ・具体性が強くて分かりやすいもの
- ・ふとした別の時に思い出せるような彫刻
- ・自分で買っても欲しいと思える彫刻

「テーマ 1 愛される彫刻」への答え例

- ・遊べるもの。
- ・自然(背景)(共生)となじむ形。
- ・風景と溶け込んでいる。
- ・いい意味での違和感がある。
- ・野外にあり天気の良い日だけでなく雨に日に濡れても面白いもの。
- ・作者の意図が伝わる。
- ・地域の歴史を象徴している。
- ・見ていてほっこり温かい気持ちになるもの。
- ・素材の質感と全体のフォルムがマッチした形。
- ・字部のアイデンティティを想像させる形。
- ・抽象的な作品
- ・発想ができる・想像が膨らむ。
- ・待ち合わせの目印(ハチ公的な)
- ・彫刻からも愛されていると感じる彫刻



テーマ2：「彫刻と宇部の街は、どんなところにどんな風につながっていったらよいのか？」

彫刻と宇部の街

どんな所がどんな風につながったらよいのか？

- ・真綿川公園の彫刻をなんとかしたい。緑が茂りすぎて街とつながりがない。
- ・配置した彫刻を回避できるようにしたい。歩いて繋がるものにしたい。
- ・海岸道路から見てもわかるような大きい彫刻があったらよい
- ・「宇部日報」とコラボして、もっと情報発信をしたら？
- ・彫刻と子育て、彫刻と教育、彫刻と保育、彫刻と工業都市など・・・
- ・地元とのマッチング・場所と彫刻とのマッチングをもっと意識すべき
- ・子供が参加できるような関係をもっと増やすべき
- ・「蟻の城」ですら知らない人がいる。もっと「彫刻の街」としてどんどん彫刻の良さを大きく発信する場所をつくるべき。
- ・彫刻の良さには限りがある
- ・学校に良いものをおいてほしい。子供の教育に重要。
- ・宇部の歴史ともっとつながる場所におく。

- ・身近なところにもっとあったらよい
- ・真綿川など川沿いとか
- ・市街地に「ときわ公園」のようにまとめて置く所をつくったらよいのでは？
- ・宇部に彫刻の美術館をつくるべき
- ・新しい市庁舎の周りに置けたらいいのでは？

- ・校区ごとに人が集まる場所においたら
- ・街を歩く人が減っているで、大通り沿いに置いた方がよいのでは？
- ・学校におくと卒業したら見られないからもう少しいつでも見られるところにおいてもよいかも
- ・宇部は市内に散歩をしたり、歩いて楽しいと感じる所が少ない。もっといろんな回避のコースをつくって、そこに置く
- ・真綿川公園にオープンカフェをつくって、それと一体で設置
- ・彫刻は静か、寡黙なので、説明が重要
- ・海岸沿いなどインスタ映えするところに置く
- ・スーパーなど市民がいくところに大きな作品を設置
- ・宇部は彫刻に投資はしているが見返りがわからない「効果」の説明が重要

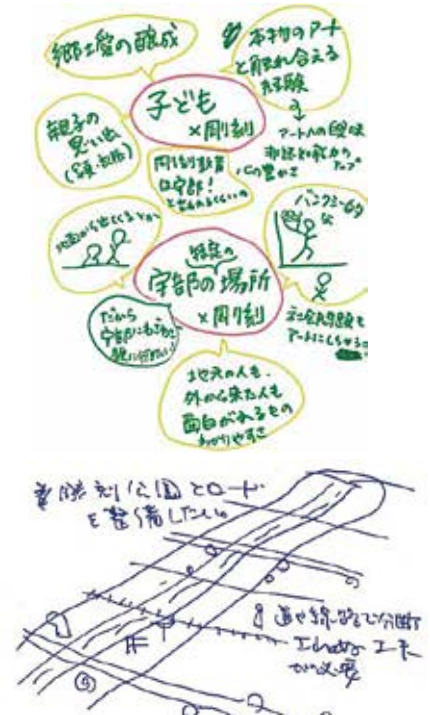
- ・学校での教育がとても大事、まずは子供（宇部ビエンナーレの本展よりも彫刻教育でつながるのがずっと重要）
- ・MY 彫刻 一人一人の市民が好きな彫刻を選んだら面白いのでは？
- ・車のナンバープレートのデザインを彫刻にする
- ・彫刻の清掃で毎年違う彫刻を清掃する（つながりをつくる）
- ・作家との交流の場をもっと増やす。今回の葛谷さんとの交流は非常に良かった。作家気分になれる。
- ・子供たちや市民が作品をつくって出展できたらよいのでは？
- ・「大賞」自体の選考に市民が参加できたらもっと市民とつながる
- ・通学路にもっと彫刻を置く（彫刻を置くと通学路になるくらい）
- ・マケット（模型）作品をいろんなお店に貸し出す。
- ・増えすぎた作品を供養して減らす
- ・市内の置き場所が限られている（西側にあまり彫刻がなり）
- ・真綿川の干潮時に見える彫刻とかユニークな置き場所においたらよいのでは？
- ・新天町に彫刻を並べて、「彫刻の動物園」をつくる
- ・作品清掃したら市民税の軽減をするなどのインセンティブをつくる

- ・彫刻は空港にあるけれど記憶にのこっていない、彫刻はまちにあるけれど記憶にのこっていない
- ・今は彫刻が「点在」してしまっている。⇒もっと集めて水木しげるのストリートみたいに彫刻だらけにしてみたら？大きいのが難しいなら手ごろな大きさのものを集めてみたり・・・
- ・宇部全体を彫刻をつかてきれいにしたい
- ・町ごとに彫刻の里親になってもらうなど、愛着をもってもらう仕組みをつくる
- ・作者のメッセージ、情報がすぐに得られるようにしてほしい
- ・彫刻模型（マケット）をもっと活用しては？

- ・街には表があれば裏がある
- ・公園や市民センター、学校などずっと人が居られるところに彫刻をおいていったらよいのではないかと
- ・一方で、学校とか部外者が入れないところだと困る
- ・現状は彫刻が「点在」して設置されてしまっている⇒もっと一か所に集めては？
- ・「彫刻通り」のような1〜2時間でみて歩けるような観光スポットに彫刻を集めて配置すればよいと思う
- ・各町に置いていくのも一方で良さもある
- ・川沿いや空港、場所に合った作品を置いてほしい
- ・ただバラバラとあるのではなく、例えば「大賞」作品を並べて、宇部にしかできない迫力のある彫刻公園をつくるなどしてほしい。
- ・宇部ビエンナーレの歴史アーカイブとしての彫刻公園

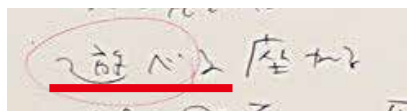
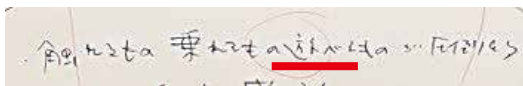
「テーマ2 彫刻と宇部の街は、どんなところにどんな風につながっていったらよいのか？」への答え例

- ・彫刻と他のイベントとの復号化。
- ・子ども×彫刻
 - ・郷土愛の情勢・親子の思い出（写真・記憶）
- ・彫刻教育は宇部！と言われるくらい・本物のアートと触れ合える経験
- ・宇部の特定の場所×彫刻・パンクシー的な、社会問題もアートにしちゃう。
- ・彫刻通りを作る。工業都市と彫刻をセット。
 - 世界や日本に発信できるものを集める。
- ・マイ彫刻、車のナンバー等。
- ・作品に関わるメンテナンスをボランティアで行うと、固定資産税の軽減を受けられる。（社会奉仕）
- ・ワークショップなどで彫刻すると作家気分になれる。
- ・まちそのものが美術館。「UBE 彫刻の街美術館」（ファール立川や箱根）



＜ふりかえり＞

対話1：「愛される彫刻とは何か？」を終えて、得られた市民のニーズに沿う事例を調査した。



「答1：遊べる彫刻」の参照事例



LAR /フェルナンド・ロメロ「ラッピング」

(金沢 21 世紀美術館、2005)

子供向けのジャングルジムをモチーフしたアート作品。



ピーター・ピアース「しゃぼん玉のお城」

(箱根彫刻の森美術館、2011)

透明なカプセルをいくつもつなげたこの作品。光とともに表情を変える形態の面白さを見出すことができる。



ヘフナー・ザックス「Suujin Park」(京都崇仁地区、2015)

小学校の遊具を解体し、地域の空き地に再構成し、一時的な公園を創り出す作品。



浅井裕介「このはな咲かせましょう」(大阪市此花区、2018)

花をモチーフにした楽しいなドローイングがアスファルト上に描かれ、子どもがそこから遊びを発見できる。

→宇部では



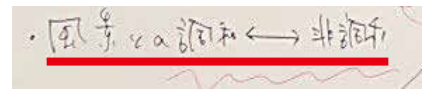
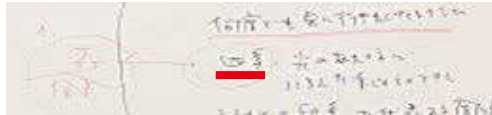
広井力「標的と人」(1969)

二十四枚のアルミ板からなる作品。子どもたちはそのまわりを無邪気に走り回ることができる。



増野智紀「遊play」(2017)

子供達に遊んで作品の中に入ってもらう事で成立する形。作品のイメージは海辺にある常盤公園から「波」。



「答 2：四季によってかわる彫刻（四季によりそのような彫刻）」の参照事例



「さっぽろ雪像彫刻展」
札幌彫刻美術館の前庭で毎年 3 日間だけ開かれている催し。彫刻的な造形を意識した作品が並ぶ。



オラファー・エリアソン「Fog Assembly」(Versailles, 2016) 霧という自然現象が素材となる彫刻。霧の中で感じる迷路性やめまい、自然に対する儚さの感覚を抱かせる。



デラー&スコフィディオ + レンフロ「High Line」(NYC, 2009)
廃線高架を使った全長 2.3km のモニュメントであり公園。植栽により季節織々の顔を楽しめる。



大巻伸嗣「Liminal Air -core-」(箱根彫刻の森美術館、2012) 一部が鏡になったため、天候や時刻によって表情が変わる。自然の意味を改めて考えさせられる作品

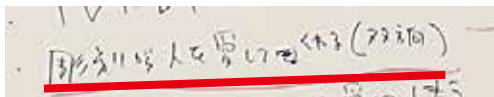
→宇部では



関正司「ロッキング・ドール」(1979)
ボディの部分は抽象形態であり、顔や頭部は具体的な女人像。風に揺れる姿が話題になった。



榮利秋「宇宙シリーズ・87 四季のメッセージ」(1987)
太陽の刻々の運行が第三者として組石の彫刻に参加することによって成立している。太陽の南中角度によって四季それぞれに表情に違った影を落とす



「答 3：彫刻から人を愛してくれる（彫刻）」の参照事例



グンター・デムニッヒ「つまずきの石」（ベルリン、1992-）
連行されたユダヤ人が住んでいた場所に石を作家が埋め込んでいくというプロジェクト。



徳島県三好市山城町の住民「徳島県三好市山城町「妖怪村」」
この地域では誰かが死んだり、水害が起きたところには必ず彫刻とセットになった妖怪話がある

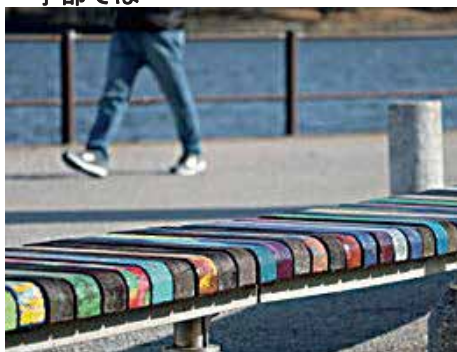


川俣正「Working Progress」（オランダ、1996-99）
様々な依存症に苦しむ人々と小径をつくる作品。共につくると
いう行為が患者に影響を与える。



RAD「Suujin Maintenance Club」（京都、2015）
街中の公共物をアーティストと一緒にさまざまな技術や方法を
駆使してメンテナンスするプロジェクト。

→宇部では



久村卓「お直しベンチ」（2017）
市内の中学校美術部生徒と一緒に、古くなったときわ公園のベンチを直してアートにしよう！というプロジェクト。



エレナ・レダエリ「PARTICIPATORY TEXTILE（パーティシペトリーテキスタイル）みんなの織物」
地域から集めた素材を使って、宇部市内の小学生と協働で、海をイメージした立体的な織物の作品。



「答 4：彫刻には抽象具象あるが、抽象的な彫刻はいろいろと受け取り方がある」
の参照事例



草間彌生「赤かぼちゃ」（直島、1994）
フェリーが直島の宮浦港に近づくと真っ先に目に入る。SNS に
頻出する観光地化されている事例。



アーティスト西野達一連のプロジェクト
パブリック空間に存在するオブジェのまわりに空間をつくり、
強引に「インテリアオブジェ化」する作品。

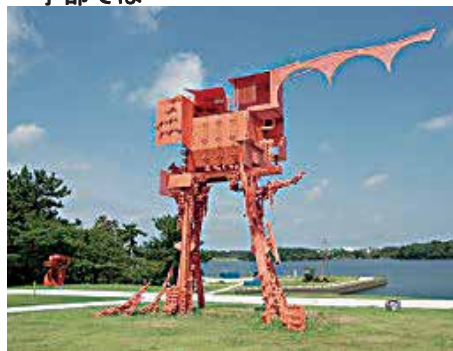


レイチェル・ホワイトリッド「キャスティング」プロジェクト
見慣れた日用品から住宅までコンクリートを流し込んでキャス
ティングすることで作る作品。



「さんきたアモレ広場」（神戸、1985）
広場の健全化に彫刻が利用された事例。広場自体も地面が隆起
しており彫刻的とも言える。

→宇部では



向井良吉「蜂の城」（1962）
当時は鉄錆がふいたままだったが、今は一部改造され鮮やかな
カーキ塗料で表面保護されている。



中出武彦「深夜バス」（2017）
夜のバスの青白い光に、虫のように引きよせられる。箱型のバ
スをモチーフにした彫刻作品。

対話 2：「愛される街とは何か？」

日時：2019年1月13日（日）13時30分～ 17時

場所：総合福祉会館 4階大ホール

参加人数：35名

コーディネーター：藤原徹平（建築家、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

協力：榊原充大（RAD -Research for Architectural Domain-）

実施内容：

第一回目の対話型ワークショップの内容の振り返りを行い、前回のディスカッションテーマ「愛される彫刻とは何か？」「彫刻と宇部の街は、どんなところにどんな風につながっていったらよいのか？」について、参加者意見についてふりかえりをおこなう。その後、RAD榊原氏による各国の「愛される彫刻リサーチ報告」後、グループに分かれてディスカッションをおこなった。

ディスカッションテーマ：

- ・愛される街にはどんな環境やものが必要か？
- ・愛される環境づくり×彫刻・アート こんなことが起きたら宇部はもっと楽しくなるのか？



愛される街にはどんな環境やものが必要ですか？

- ・人とのつながり
- ・家と職場以外でゆったりできる場所
- ・歴史を住んでいる人が知っている
- ・生まれた場所＝住みたい場所
- ・交通の利便性がある
- ・会いたいと思える人がいる街
- ・おかげ横丁（伊勢神宮）のような歴史的コンテキストのある街
- ・にぎやかな街
- ・おしゃれなお店が多くて女性のテンションが上がる街

- ・人々とのつながり
- ・コミュニティがある街
- ・戻りたくなる街
- ・子供の時に街につながるイベント（お祭りなど）

- ・働く場所
- ・街の中に集まれる場所がある
- ・多世代の交流
- ・テイクアウトできるコーヒーショップがある・本屋さんがある

- ・緑や花がたくさんある街
- ・人が集まるシンボリックな場所がある街
- ・オープンカフェ
- ・公園がもっとあって遊具がもっとあるといい
- ・おいしい店、おしゃれなお店があるといい
- ・けん玉やアニメなどの専門店
- ・美しい街並み
- ・交通の便がよくなるいい
- ・駐車場が点在している
- ・ほっとできるような場所
- ・美術館があるといい
- ・パーティができる場所

- ・若い人に活力を感じる街
- ・いろんな人とつながりやすい場所や空間
- ・歩いていて楽しい
- ・いいカフェがある
- ・挑戦しやすい街
- ・歴史的な裏付けのあるまち
- ・個人商店がもう少し欲しい
- ・人と人が関わる体験がある

① 人が集まる場所

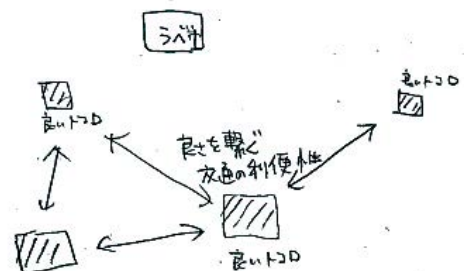
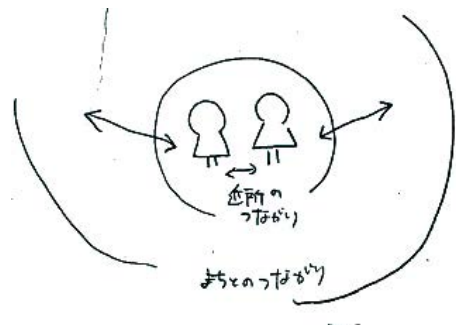
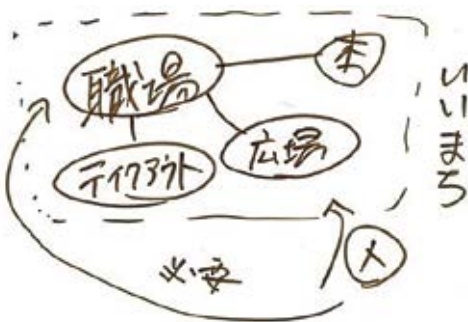
若い人 → 仕事 経済

コミュニティ

コミュニティをつくる場所

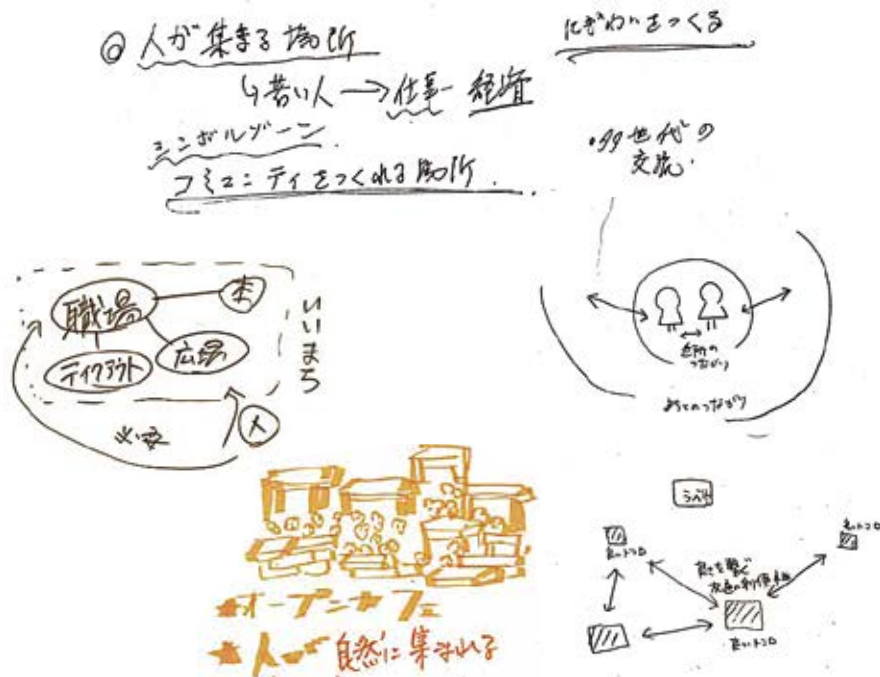
にぎわいをつくる

多世代の交流



<ふりかえり>

対話2：「愛される街とは何か？」を終えて、得られた市民のニーズに沿う事例を調査した。



→「人が集まる空間」の事例紹介



モトタバコヤ【大阪】

大阪市此花区にある元タバコ屋をリノベーションした、小さなカフェ、地域で活動している作家などのシェアショップ、イベントや寄合いのためのスペースからなる小規模複合施設。



→「人が集まる空間」の事例紹介



千鳥文化【大阪】

大阪は北加賀屋に残る築 59年の「旧千鳥文化住宅」を dot architects が補修。クリエイターや地域の人々がゆるやかに交流するスペースとして、飲食、ギャラリー、イベントスペースなどを備える。



千鳥文化商店



→「人が集まる空間」の事例紹介



VISITOR CENTRE (NAKAYOSHI) 【愛知】

2013年あいちトリエンナーレ（8/10-10/27）期間中、青田真也と L PACK（小田桐奨、中嶋哲矢）の3人によって長者町エリア内につくられたまちとアーティストの「ビジターセンター&スタンドカフェ」。トリエンナーレ出展作家と交流できる場として人気に。一日店長をつとめる作家さんも現れた。



→「人が集まる空間」の事例紹介



バンカートスクール【横浜】

バンカートスクールは、横浜・馬車道に残る歴史的建造物を芸術文化に活用した BankART1929 のプログラムのひとつとして、2004年 4月に開校した。バンカートスクールの守備範囲は美術・演劇・写真・建築・音楽・ダンスなどアート全般におよび、講師は各ジャンルの第一線で活躍する人たちがばかり。子供向けのワークショップから専門性の高い講座までレベルはさまざまだが、いずれも少人数制で、講師と受講者同士の親密な交流を重視する現代の寺子屋をめざしている。



バンカートスクール 2019 年2 月-3 月 募集案内

月 | 「なぜ写真か? part2」 鈴木理菜 @BankART Home
火 | 「朝鮮通信使 part3」 仲尾宏、他 @BankARTSILK
水 | 「不連続統一- 発見の手法」 TeamZOO @ BankART Station
木 | 「美術館の読み方、楽しみ方3 世界編」 村田 真 + 和田菜穂子 @BankART Home
金 | 「歴史的建造物保存活用のターニングポイント」 @ BankART SILK



BankARTschool

バンカートスクールは、横浜・馬車道に残る歴史的建造物を芸術文化に活用した BankART1929 のプログラムのひとつとして、2004年4月に開校しました。と書いてから早15年。場所は「馬車道に隣接する歴史的建造物」から日本郵船の倉庫へ、講師の募集もどくへ、そして多岐にわたるアート分野にわたる。講師は各ジャンルの第一線で活躍する人たちがばかり。子供向けのワークショップから専門性の高い講座までレベルはさまざまですが、いずれも少人数制で、講師と受講者同士の親密な交流を重視する現代の寺子屋をめざしている。この15年の間に279講座、計969人の講師の方々と集まりました。受講生は半世紀のあひょうちやんから55歳のおじいちゃんまで、達べ4700人を超えます。ぶちやけだ。これらの実績をふたて。いこうで開校にはならない。いこうで開校が得られるわけでもありません。受け取るだけなら人の役に立たないのです。むしろここから自分たちで立ち上げていくのが、それが開校しているのです。

(バンカートスクール校長 村田 真)

BankARTschool 2018年2月-3月 募集要項



バンカートスクールは、横浜・馬車道に残る歴史的建造物を芸術文化に活用した BankART1929 のプログラムのひとつとして、2004年4月に開校しました。と書いてから早15年。場所は「馬車道に隣接する歴史的建造物」から日本郵船の倉庫へ、講師の募集もどくへ、そして多岐にわたるアート分野にわたる。講師は各ジャンルの第一線で活躍する人たちがばかり。子供向けのワークショップから専門性の高い講座までレベルはさまざまですが、いずれも少人数制で、講師と受講者同士の親密な交流を重視する現代の寺子屋をめざしている。この15年の間に279講座、計969人の講師の方々と集まりました。受講生は半世紀のあひょうちやんから55歳のおじいちゃんまで、達べ4700人を超えます。ぶちやけだ。これらの実績をふたて。いこうで開校にはならない。いこうで開校が得られるわけでもありません。受け取るだけなら人の役に立たないのです。むしろここから自分たちで立ち上げていくのが、それが開校しているのです。

バンカートスクール校長 村田 真

→「人が集まる空間」の事例紹介



島キッチン【瀬戸内・小豆島】

島キッチンは、瀬戸内国際芸術祭 2010 に、豊島の集落の空き家を・再生した「食とアート」で人々をつなぐ出会いの場。東京・丸ノ内ホテルのシェフのアドバイスのもと、豊島のお母さん達の笑顔と豊島の豊かな食材を使った独創的なメニュー。外のオープンテラスでは、GW や夏休みなどを中心に、ワークショップやイベントが行われる。



7. 2 オープンブレスト / 企画書づくり

これまでの対話型ワークショップで得られた市民の意見や学芸員からのアイデアをもとにオープンな企画会議を行った。

<概要>

日時：2019年2月10日（日）13時30分～ 15時30分

場所：総合福祉会館 4階大ホール

参加人数：24名

コーディネーター：藤原徹平（建築家、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

コメンテーター：日沼禎子（女子美術大学教授）

協力：榊原充大

川勝真一

本間智希（以上 /RAD -Research for Architectural Domain-）

岩井一也（フジワラテッペイアーキテクトラボ）

実施内容：藤原氏、榊原氏による前回までのふりかえりをおこなった後、グループに分かれてディスカッションし、企画書について意見をまとめた。



テーマ

・ときわ公園活用プラン

これまでの対話型ワークショップで上げられた市民の声や学芸員の声からときわ公園の課題を提示した。現状のときわ公園の様子について市民が感じていることをときわ公園の地図を元に意見交換を行った後、現状からより快適で過ごしやすいつきわ公園にするために、具体的にどのような施設や活動が必要かブレストを行なった。

・まちなかビエンナーレプラン

本市の市役所本庁舎は、老朽化や耐震性能、ユニバーサルデザイン、防災拠点としての機能不足など、様々な課題を抱えていることから、建替えを進めている。新庁舎整備に合わせて市役所周辺を宇部市のビジョンを示すシティプロモーションの場にしていくことが重要となる。真締川沿いが市民や来訪者にとってどのような環境になれば人が集まるのかブレストを行なった。

・中心市街地のネットワーク交流拠点プラン

2回目の対話型ワークショップで「街の中に交流の場所が欲しい」という市民の声を元に宇部における交流のあり方について提示した。大きな市民ホールを整備する方法ではなく、街の中の使われていない空き家を利用することで生まれる交流のあり方について市民との意見交換を行い、その後市街地のエリアごとに性格やポテンシャルについてブレストを行なった。



企画書 1：ときわ公園活用プラン

常盤公園の現状と活用アイデア

公園への／内へのアクセス

- ・車で行く人にはいいが、バスや電車で行動する観光客には不親切
- ・どの駐車場にとめればいいのかわかりにくく、有料になって少しためらう
- ・学部ビエンナーレや彫刻の丘に行くにはどこから入ればいいのか分かりにくいので、専用のバス停などがあればいいのではないかな
- ・彫刻を見に来た人にわかりやすいインフォメーションセンター、もしくはビジターセンターがあるところであつそこに行くことができる

公園のインフォメーション

- ・動物園、遊園地、彫刻展示、温室など各施設の案内やサインを統一。それらの設置位置なども検討する。ホスピタリティの観点を大事にする
- ・駐車場から動物園に抜ける道路下の通路が暗い。明るくしつつ、インフォメーション的な役割をつくる
- ・各施設にインフォメーション機能を明確にし、他の施設の案内もおこなえるようにする
- ・初めてきた人に対して、施設や散策コースの所要時間を紹介する
- ・彫刻を起点と終点にしたジョギングコースなどをつくって案内する

彫刻の鑑賞環境

- ・常盤湖を背景とした彫刻の展示がとても気に入っている
- ・インスタ映えという点でも、彫刻の背景がどのようになっているかは重要ではないか
- ・絵になる彫刻スポットを用意する
- ・現在は湖水ホールで企画展示やワークショップ開催されているが、彫刻展示との連携が弱い。また来場者からするとわかりにくい。
- ・雨の日にも楽しめるような屋内スペースの鑑賞スペースは必要

食事・休憩

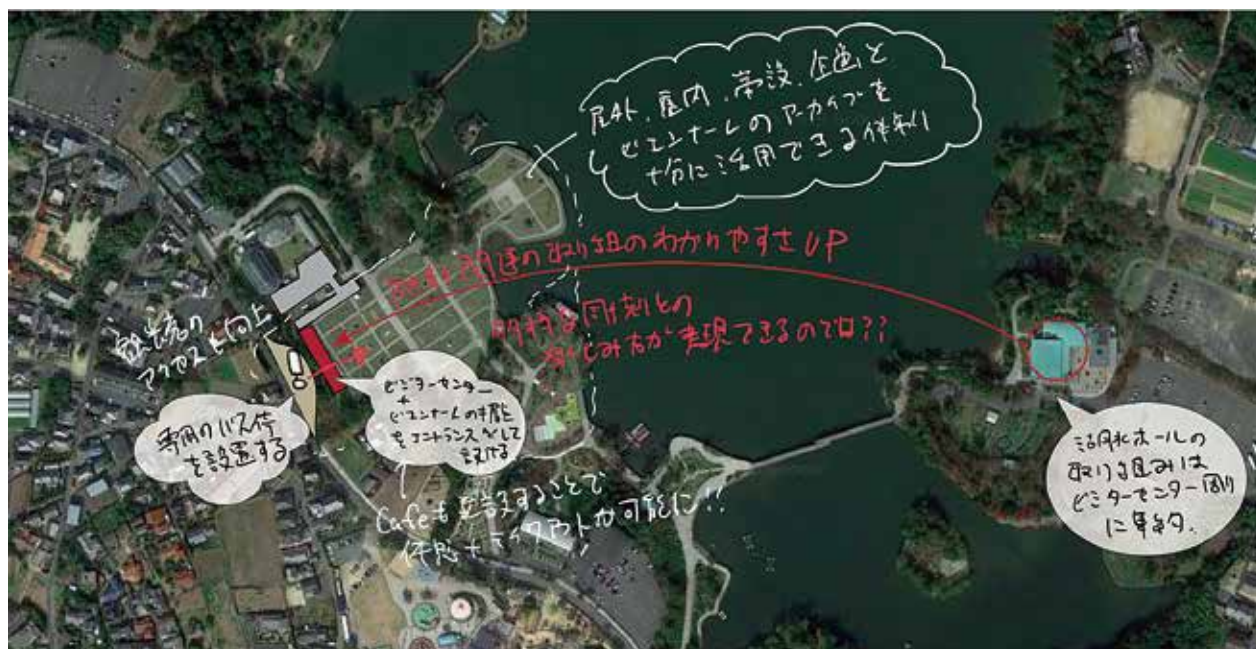
- ・冬場は寒くていけない
- ・昼食の選択肢が少ない
- ・冬場や平日は人が少なく、商売として成り立たせるのが大変
- ・キッチンカーなど、お試しで出店できるような仕組みを取り入れてはどうか
- 最近週末や祝日にはキッチンカーの試みもある
- 最近お弁当屋さんもおオープンした
- ・休憩するところがありません
- ・彫刻を見ながらゆっくりすることができない
- ・屋内で／から彫刻を楽しむたい
- ・天気の良い日はコーヒーなどをテイクアウトし、外で彫刻を見ながらゆっくり過ごしたい

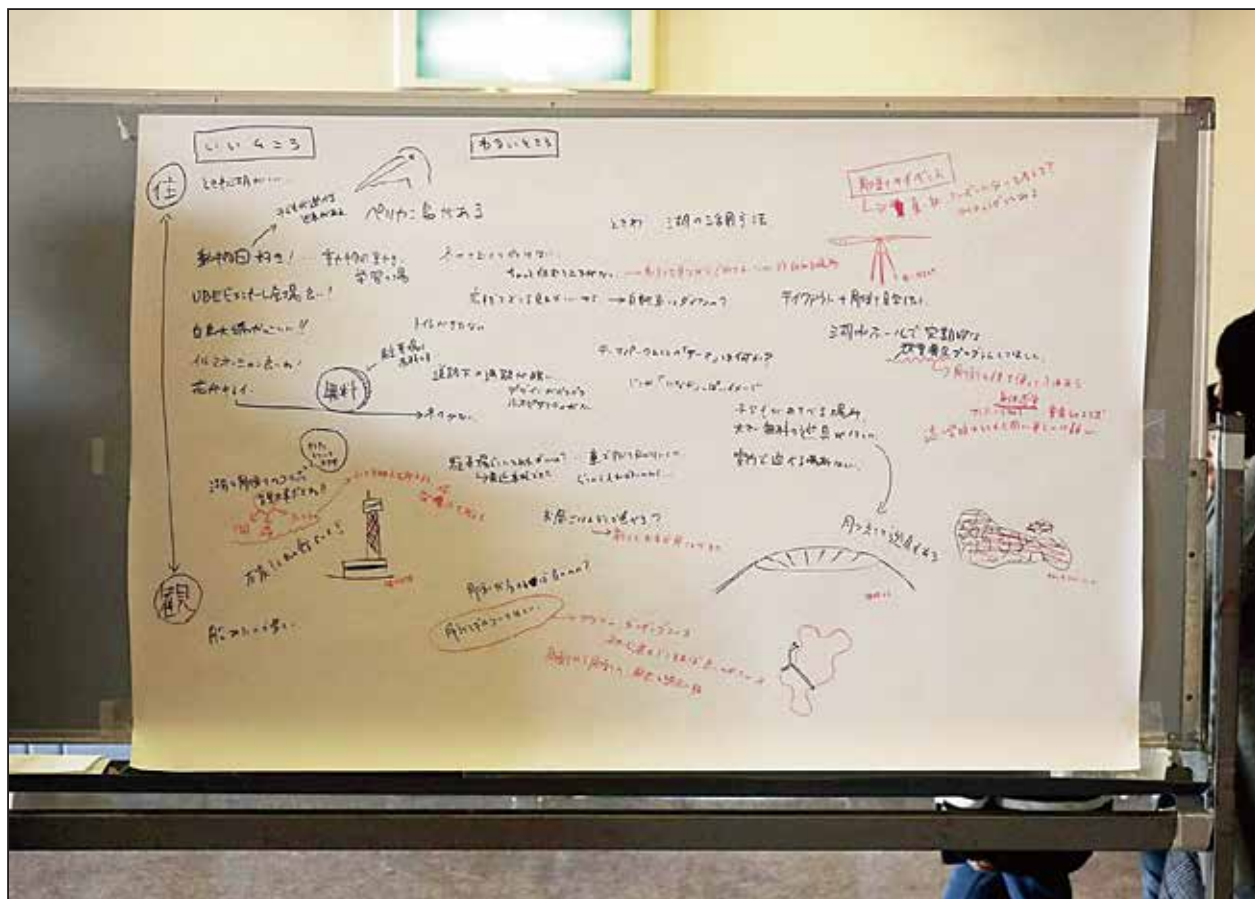
子ども関係

- ・子どもが遊べる場所、大きい遊具が少ない
- ・動物園には子どももあるが遊べる遊具があって人気
- ・室内でも遊べる場所が欲しい
- ・教育普及プログラムをして欲しい。体を使って彫刻に触れ合う体験など。
- ・宇都の小学生は立体造形感覚に優れている

その他

- 常盤神社のように湖に浮かぶ神社の存在は珍しいので観光客にもアピールできる
- 石炭記念館の塔の上から宇部のまちが一望できるおすすめスポット
- ジョギングコースとして人気が高い
- 白鳥大橋が美しい

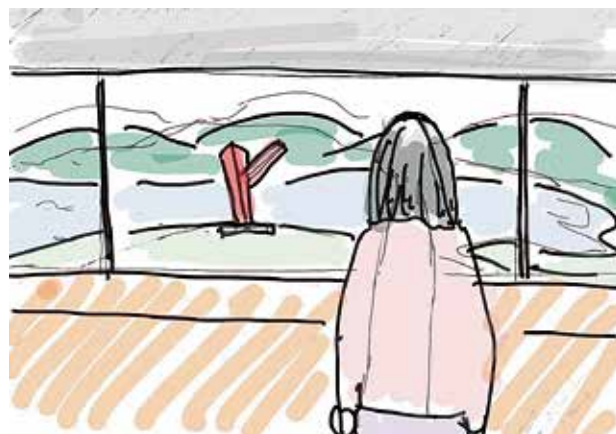




オープンプレスト中に書かれたメモやスケッチ



多様な鑑賞形態の提案。コーヒーを飲みながら彫刻を鑑賞する



雨の日は屋内からも鑑賞多様な鑑賞形態の提案。



週末にはキッチンカーなども活用し、ピクニックや休憩できる場所を増やす

企画書2：まちなかビエンナーレ会場整備プラン

まちなかビエンナーレ会場整備構想 アイデア

①まちなかビエンナーレに対する思い

- a. まちなかビエンナーレは良いまちの活性化に繋がる遊びに行きたくなる
- b. しかし問題がある
駐車場がない
川沿いが狭い
- c. どんな場所にするか
場所の広さに合わせて大きな彫刻や小さな彫刻がある
カフェがあり、目的になる公園

②ときわ公園との差別化

- 作家に滞在制作をしてもらう
空き家をつかう
作家と近い関係、交流が生まれる

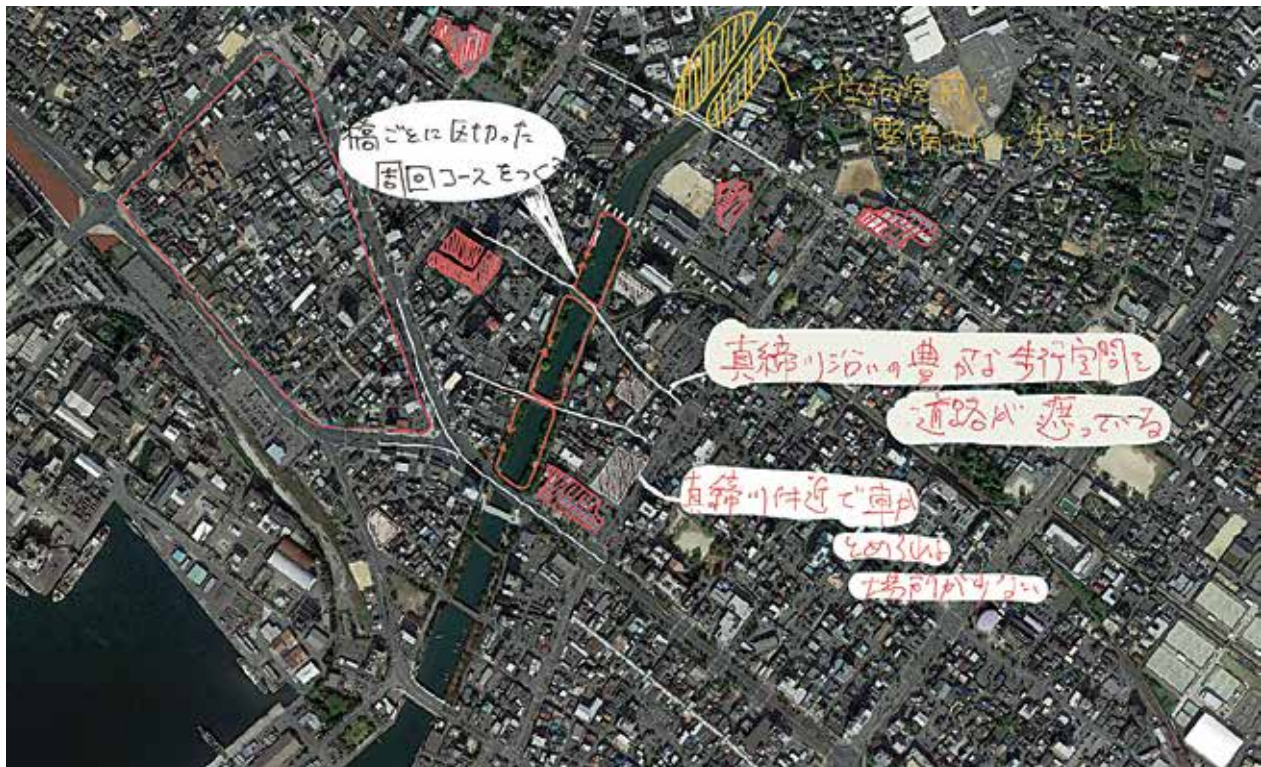
②住んでいる／来訪者それぞれの魅力を考える

a. 宇部に住んでいる人

テイクアウトしたものを食べたり飲んだり
子どもが遊べる彫刻がある
散歩、ジョギングができるリバーサイド
彫刻のライトアップ、イルミネーション
和むようなわかりやすい彫刻
オールシーズン楽しめる
樹木が鬱蒼としていない広場
鯉のぼり / イカダレース

b. 宇部にやってくる人

ホテルからのアクセスが良い
夜の様子を見たい。彫刻と飲みたい。
ストーリーやルートをつくる。見た方がいいマストリスト。
山口大学でおこなっている学会の人たちを呼べないか？
市役所に展望台をつくる。→宇部興産が見える。
公園の環境と彫刻を楽しめる、キッチンカーで楽しめる飲食
” 川の家 ” かき氷小屋が昔あった。
SEED を持ってくる。川沿いに目玉になる彫刻が欲しい。
彫刻のライトアップ、イルミネーション
真綿川が起点となり、他の彫刻やスポットとなる場所を見て回る





オープンプレスト中に書かれたメモやスケッチ



目的地までに、いくつか拠点がある散策路が欲しい

川辺でコーヒーを飲みながらのんびりしたい



夜でも見通しのつく園路がいい



上から見下ろすビューポイントがあるといい

企画書3：中心市街地のネットワーク交流拠点プラン

まちなかお宝&軒先ネットワーク交流拠点 アイデア

①まちなかお宝のアイデアと類型

・外から／内からの地域資源を考える

A 宇部唯一無二のすごい宝

ex: 渡邊翁記念館、旧島図書館、ANAクラウンプラザホテル、彫刻「シード」

B 宇部なら何処にでもある宇部ならではの宝

ex: 桃色煉瓦

C 宇部の街や歴史を語る上で欠かせないもの

ex: ライオンの狛犬、真綿川、地形や道や坂

D 魅惑の空き物件

ex: 角のタバコ屋

E ポテンシャルのある場・スポット・通り・エリア

ex: 松島通り、渡邊翁記念館前広場、島地区

F 来訪者が喜ぶ宇部の個人店

ex: はとや、凡、ひかり書店、かふえれすとライブ、吉松老舗、蝶屋生花店、山本写真機店、原酒店

②軒先ネットワーク交流拠点の重点エリアのアイデア

・通りのポテンシャルによって棲み分けをする

ex: 銀天街→夜の街、2次会用の遅くまでやっている店がない

ex: 松島通り→宇部新川駅近くで高校生など日常使いの可能性ある

③まちなかお宝&軒先ネットワーク交流拠点のための留意点

・宇部に多くいる学生が街に出やすくなるための仕組みづくり

・子育て世代が集えるよう駐車場を計画的に立地する

・町歩きルート・テーマをいくつも設定する

・地域資源を再発見し学ぶ地域教育により地元愛を育む



A-1 渡邊翁記念館



A-2 旧図書館



A-3 ANAクラウンプラザホテル



C-1 真綿川



C-2 ライオン狛犬



D-1 空き店舗



B-1 桃色煉瓦1



E-1 坂のある島地区



B-2 桃色煉瓦2



B-3 桃色煉瓦3



F-1 花の自販機



F-2 レトロ喫茶



F-3 軒



F-4 レトロ食堂



D-5 空き店舗



D-2 空き店舗



D-3 空き店舗



D-4 空き店舗



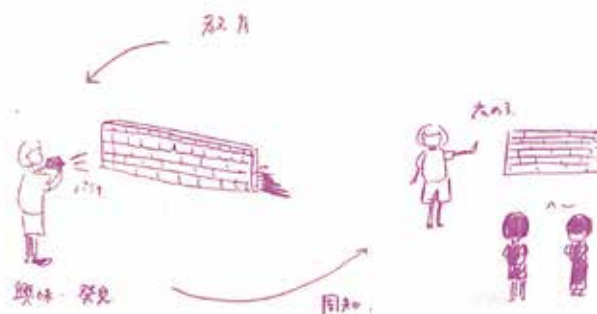
B-4 桃色煉瓦造・空き家



オープンプレスト中に書かれたメモやスケッチ



北側に、村野藤子 ほかの地域資源を知りたい



「野外彫刻・アートによるまちづくり活性化プラン」

宇 部 市

作成協力：  **FUJIWALABO**
フジワララボ

